信濃國諸鳥物語 之

へ13
3140
7

駿河屋

門へ13
號3140
巻7

後寛僧都嶋物語巻之六

東都　曲亭馬琴編次

第十四套

抱琴述情　鏡を合しく誓ひ打ち　舞鶴小姐の事

山城國愛宕郡。鞍馬うり五里北ゑ。大悲山といふ高峰ありけり。その北丹波ゑ雑ゑく。城北村落の際なり。山の半腹ゑ定峰寺天台宗。麓ゑ大布施。寺谷の郷あり。頭をめぐらしく左辺をうかゝへば。紫見巔もうゑ低く。右辺遥ゑ直下せば。鞍馬の山も高くそびえ。二嶺ゑ続く木松川。好風好景画くとも。筆みいりて及ぶべからず。ゆゑに五ッの蔵うれど。人迹絶る深山なれば。樵歌牧笛の音も聞えず。文客詩人も探ぶらのゑ。ゆゑ以ゑ今茲三月中旬より。洛堀川なる鬼一法眼こゝゑ山荘を後理く。親子主従僮ゑ四人。閑居ゑ人ゑ交参なし。

昭九九月十二日購求

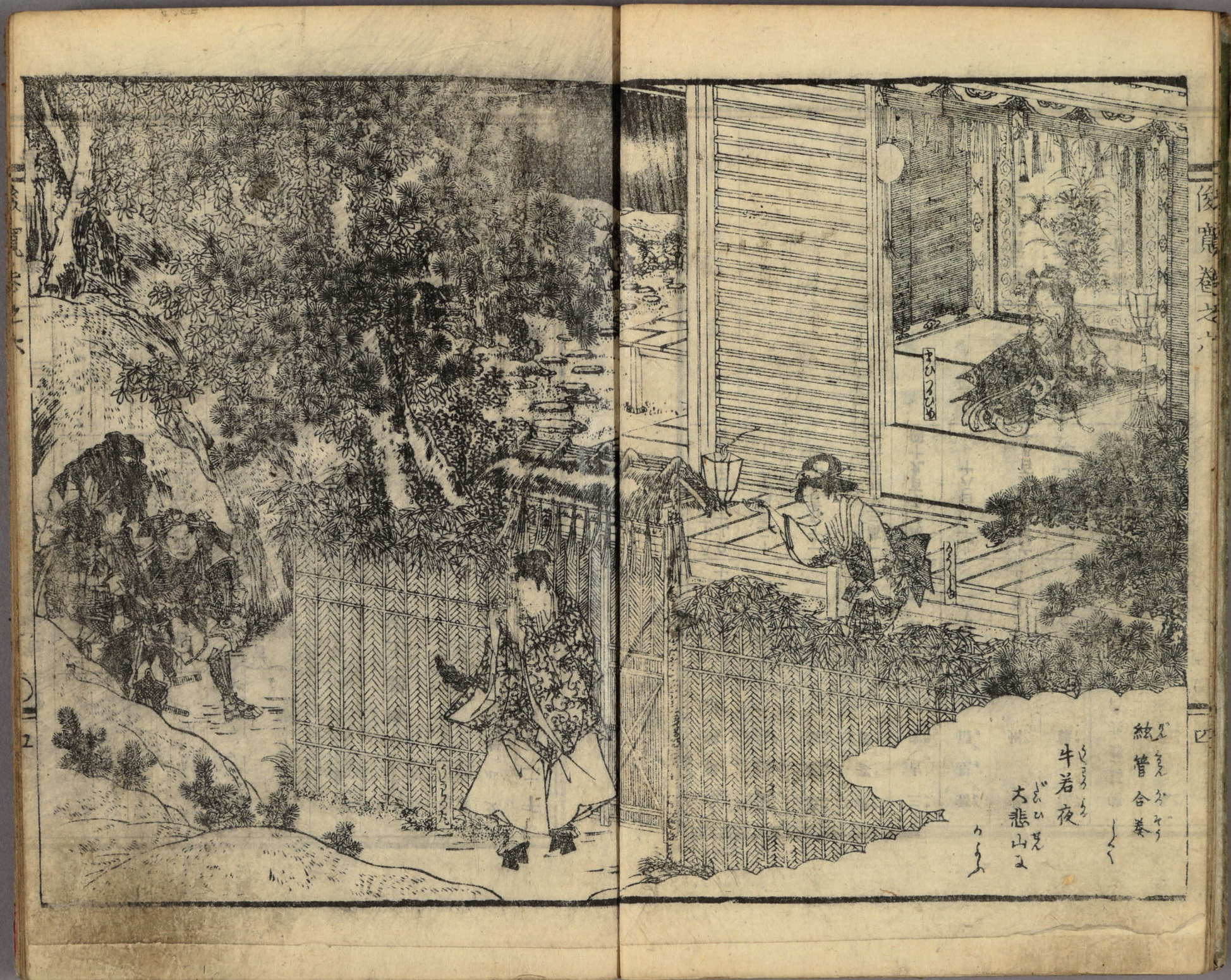
原の鬼一法眼ハ。その本貫も定うるうとび。或いハ伊豫國吉岡
の郷ヨ人とゝ。遂ヨ兵学武藝をゆゑ一家をゆゑぬ。ゆゑ去年の
冬ゆゑ京ヨ出。堀川のほとりヨ僑居しゝ。今出河義圓
と稱し。亦吉岡法眼憲海（義経紀大全の注ヨ見えゝ）と号し。子弟子房ゲ秘する正
医房義家の奥旨を極めゝ。家藏の兵書いと多ゆゑ。そゞゆヨ文武
龍虎豹犬の六韜。就中虎の巻い。大江匡房卿。訓閲集ヨ載ゆゑと
いとゞも。ゆゑ口決多ゝ漏されゝるを。件の鬼一い故めゝ。悉ゝ傳受し
ゝといふ。ゝをゝ竹園槐門の武人。その門ヨ入ゝんゆゑと。
希ふゆの少ゝなゝど。ゝし行ヨ。平相國清盛入道。彼虎の巻のゝを偽
ゝ。それ見ゝとゝ。丹左衛門尉基安ゝ。それを求めゝゝと。いと
急迫ゝとゝいとゞも。鬼一ゝ決ゝ。侍ゝ入道相國。安ゝゆゑ。

憤ゝ。侍者の往来数回ヨ及びゝゝバ。鬼一ゝ決ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。

有一日出雲路へく。鞍の壮佼ホゞ。印地打とらんとをして。拾ひを
えく。おのそ五七人して扛あぐるとも。動を擡起、かつて。とゝ動る人石
を湛海へ足駄穿るゞ〳〵。おろ〳〵ろみ抱きあげつ。ゑゞ〳〵あつて擡と投
捨ゝしゝ。衆皆舌を振く驚き怕恐見て。湛海とゞ
喚るゝ。ゝゝる。舞鶴ハその三四日ハ。おゝ〳〵物よ魔るゝゝて。
滝ゝと煩つゝゝゝゝゝれるく。入るのいべくもあゝで。香樹のゝを。
ほうゝ近く行ゝしつ。呂伍とるく。物ゝひゞるゝ。文鬼一法眼ハどゝゝ
愁ひて。ゝ物の怪の而為るゝゝ。術をあれゝく遽しく。土居の詹よ
注連川めぐし。境二面を柱るみ。ゝ鬼ゝぐの秘符るゝどを。便室
の壁ゝ貼ゝゝゝ。夫猶ハ陽明みゝく至く明るゝるのゝ。精ハ陰物よ
そ。偽変るゝのゝ。偽をゝて至明よ當とたハ。その本形を著す

ゝ紙ゝるゞ。されが鬼一が殪を掛るゝ。妖怪を照さんとそるゝべし。ゝ治よ
時めく医師を招ゝく。舞鶴が病ゝの要を尺るゝ。鬼邪十三穴よ
刺ゝゝゝ。ゝ地ゝかゝり果ゝんとゝゝ。鬼一ゝゝく。ゝゝ何の書よ出るゝ問よ
醫師、巻ゝく。千金翼よ百邪よ病りのゝを刺ゝゝ方あり。所謂十三
穴ハ。一を鬼宮といゝ。二を鬼信といゝ。三を鬼壘ゝのゝ。四を鬼ゝ
といゝ。五を鬼路といゝ。六を鬼抗といゝ。七を鬼床といゝ。八を鬼市といゝ。
九を鬼舎といゝ。十を鬼堂といゝ。十一を鬼義といゝ。十二を鬼封臣と
いゝ。十三を鬼封といゝ。ゝれが則居白が施ととろゝ呂ゝのゝ。今ゝの
十三穴よ刺ゝゝゝゝハ。鬼病立地よ平愈せん。但鬼義ハ。その陽知陰よ
近し。婦女子ハ。羞ゝく療治をゝけゝゝゝと。面着しゝが。果しゝく舞鶴ゝ。
臧治のゝと。幼ゝゝゝ嫌ひ付るよ。ゝれハ放ゝゝゝゝゝく推辞しゝゝ。医

論もいとゞよろづよりけり。これ実に雅鶴が。物の怪の憑るなるべし。
かくいひうるに。又と湛海を作謀り。日夜便室に蟄居し。殺
人のあれば。その密夫に別人をあらぬ。則牛若丸なり。かゝれば
後にこそ思ひ合れ。さても源九郎牛若は曹司は。いまだ治業の首
なり。陸奥の秀衡が館に。四年の春秋をもく。今茲四月の比源三位
頼政入道が隠謀を伝聞く。密に洛に走の。彼卿又子と謀り
あらんとその牙は洛外に潜む。頼政を討んとく。平家の軍勢数を
揃へく。うち出る虚に乗じ。六波羅を政あとさんと。残党ありしるに行器
合朝ぞ〜く。頼政は南都へぞ向へる。宇治河の上に残ひ敗れて。
又子主従悉く討死し。高倉宮も討死ぬとのよれば。牛若は。いく
迹を暗くく。大悲山の禁に躲ひ。或は猶叢案山子の蔭に立ちのび
て。路人の物くうを窺ひ。或は鬼一法眼が山荘に往来しく。
虎の巻を見ばやとく。雲にそぼち風に流らし。姿を窶し。
乞を労しく行に。むくつけき寺谷あく。案山四郎を一箭
に射殺し。難波が黨を鑿みしく。蛾王を赦ひ。ひしが徒
壽丸を。荒法師に奪ひ去りく。安らぐ心ひゆに。件の
悪僧は鬼一が弟子なりといふ。岩投湛海なるべし。ちりぢり徒妻
丸は囚はれく。大悲山の別荘にそあこがれく。まづ蛾王にその
ありを知さく。次の日の暮るを待く。いと綺羅やかに打扮つ。
曩に鹿谷あく。俊寛僧都が。臂弓出しく。進ぶしらる小枝の
笛を携く。九折なる深山路に。八の歌口常夏の。花の香あく
うち湿し。鬼一法眼が山荘へ。うちひらひつ。彼が洛の旅館へも。悉く


俊寛僧都
紙管合巻
牛若夜
大悲山
きひろひめ

ひとりへくるとたい。出あへるものもすくしよ。舞鶴姫いとの形みる。御
曹司を怒志しく。心を焦し。情を運び。侍児香樹しと。一昨霜よ
招を入れ人伝せさまくよ。ゆくりをくる口説よ。牛若の色よ
弱まく。志を授しまくもあくねど。彼虎の巻をそん為よ心つく
い回答ありど。君が心操よ傍くい。そもかくも。家ないひらへく。
虎の巻を引さしまく。ちくらば鷲の食を襲く。僧老を知る
べし。いと信ずよ使えまくば。舞鶴い。いと易に入るよ。兼ねくく。
入道相国の威勢をりく通くまくば。その母えるを難き虎の巻
を。ちば私よちべうもあくど。そどうふくく本意遂まんど。つば
情愿もいぶくまくん。そせんかくせん。と思くく。嬬き隨よ垂蟄て。
猛よ物の怪くんぶいひらく。今宵も紛や味酒の三輪のむろしの亭

環くまくぶ。扶戸の響もるくい。暗号の笛とたくに琴を弾
あいしつあひ初る。ちのびねいせね相語よ。挑いいまぶかて
さえの。利強よかかれ草。結びくれくる契くさる祝よ
牛若凡い。山路まく日を暮し。頃しも五月末の八日の烏夜を
螢よてとさしく。谷川よそん。松を葉さ。烏帽子よ小結して須彼
紗の直垂よ。白き大口の袴を張くし。備前紀業が打くくる。二尺
一寸の太刀よ。虎の皮の尻鞘し。児ぶくるんが眉とくて。高き足駄
を穿かん。人迹絶くる山中よ。吹む笛の音さやくふく。一里ら
外よ澄くくれが。彼君遅しと。舞鶴い。端ちくう裾をくく。操指
玉琴い。指くくいくよ。箏の。笛の叢竹くくを。弦と箏とを合
奏し。幽咽くる泉の流い。氷の底よ難ひあり。適怨清和。節よ隨ひ

笑ふがごとく恨むがごとく。殺るがごとく所ふがごとく。小倉山峰の楓樹ハ半ばは深ねぐも。牝鹿ハ角を倚て。吹ぞあれたる小枝の笛よ。いく夜ぞ。琴の。をつのゝ尾よ。鏡併。うけく。ぞ頼む山鳥の。名よこぞ。しる節。博士。繁手急管。金玉の主戸。玲瓏とゝくいと妙。斯て牛若ハ。鬼一が山荘の庭門よ立在ものよ。雅とハ。ちゝぶ。野袴よ編笠。ふかく。ふる武士。騎兵三四人を先よ立。曹司のあらめよ跟て。門方近く来しが。如法暗夜のごとくなれば。牛若ハ。れを。ふりのハぶ。彼騎兵ホも左右ふくいうちもかゝらぐ。耳をふりうハしく。ちゝぶ。密語。ふる雅萩の中よ躍出る。當下牛若ハ。小枝の笛を腰よ挿て。母ふくと音法出のハが。裡ホも琴の音を絶て。侍女香樹。指燭して。

樹間を立繞て。忙しく出ぬつ。緒折戸を。そと開。見ふ見て。笑ゆるうちに笑て。ぐく昨夜ハ来ぬる。今宵も湛海ハ。麓乃ゆふくとく出るぶ。いまぐ。ぬ。ぶ。ぶ。ぶ。子舎よ坐をれば。ぐかりの関も侍て入せひね。と信ふて。ぶく殺川ゆふれば。雅鶴ハ琴遣て。縁頬よ出逗。ふち笑ゆるのゝあり人ハ仇ぶ。ぶ。ぶ。

かゝぶ黒髪のいと長やかなる。雪なぐらなん膚の白さ。女よ
さくさくまゝしれよ立ちくびさくん。花の傾ける花よりなん。なほ
勝るとぞえる人。香樹の形容。うちほうえくさくも姫君
のそうつれるさよ。いつまでかくく坐する。朝よりよりよりて。
待もこびのみの仰げるこゝろつけよる口説て。おもひ人
かぐらを学えるのざる。繁蕪。まのびよ堪ぬ風のすゝく。ありとぬ
くくも靡くする。人のこゝろもうゝまくふ。さもなくよりくるるの
を。いとをさなき。とゝ遣りく。伊豫簾川おろしく。外面へ退る
ぬ。舞鶴いとんくく。いくくびゝ引もいとゞ。傾く毎よ并ゐ。
挿改の花も散る狩とえく。前もたゝぬ春の蝶の。雨よ悩めく
風情ゆく。ゆゆよ頭を擡ぬまで慕ひ寄るよ。假初

夜さうちとけのみざるかは幼けく。貴き賤きおしなべく。色情
よ分別のうしとゝども。素姓も定うるくぬりの。女児へくく嬉ひ
ものぐ。ゆくくそぐめよりゆひ絶よ。強顔ゆえのみざる。源家の上
童よ在さと。ありつ惑ひぬる。過世あゝく待るる。いとゞ
行きいしく後よ。笑ひのぐいよ。情めしく情ゆ。と恨
羞つ顔よ。紅紫ちらしく白川の関ゆえ行る山おと恨
も又憎くねば。曹司の声を低し。ゆえをして
浅かゝぬも。ありひ忘れまめくせぬぐ。うちもそけぬを虎の巻を。
ゆるゝ紙ぐれば。情愚ぐよ稱のぐ。知らし言のいくぐ
ゆくんや。彼秘書をえるまぐ。と言殆残しく文人と。裳を
て引ぐめ。ぬゝかゝぶ思一ト。ぐよ難面くぐ。春の氷の落情ぐる

ものをいふこゝろひあらはなれば。虎の巻を見ぬ間と。宜しからぬ偽をし
まどくふるくい遥かなる。きのふの人のいへるやうに。仏曹司ふか。徒
の姫君。あらまほしきよあらばやと。色情を意外の正るべと。世の常
言ふいへまどぬ。ある君をやくまでよ。ゆゑ惑ひ悪因縁。慕ひ奇
ふるうさうふ。今生地獄に教へしとぶ。君が一夜の情へ多くとも。百年
の命何ぞ惜ん。只此手づゝ双の靖と。すゝく墓の煩悩。苦
提の道へ導すべと。理るまで怨ぶれが。牛若うねくのこゝろ
ふ。見るべきの仇見ぞーく。恨みのいとぞや。これは結髪の
妻女あり。と。問ねがひもまゝ。そのお女いと一トとびあひて
後を四年が程。遠離まゝが面影を。定るあれもおぼえぞ。別れ
まゝ去年の春。むすくまりぬと昨夜泣くいと悼くぞふこゝろ
とも。虞舜と両の后あり。孔子と離別の婦あり。ようや正室あれが
ちく。他一契りを結びぬるめり。丈夫の一言は。駿馬も追ひがたし。
いふまゝ偽をるれど。もん身こそ頼ーかね。百年の命も惜ぶと
思ひのが実るべ。むすばぬまでも案内ーく。虎の巻をとせるは
ざる。やぶ問べたまあり。賓を何如と坐る。達しめへと宜べば。舞鶴
姫眉を顰め。虎の巻のまは。いまは賓へも。理るーまあり仕
ねど。賓の来ませーまへ。いまぞ泣ども及びまぐぐ。といはせものゝ
いな。さあはあらじ。湛海が伴ひまる。賓のまりふこそ。いまぐ
あまへん。と面正しく問へ。舞鶴やうやうに応ぜ。原来彼徒
壽とやまんがるのよ仕ーし。彼を平家を頓ん。と謀る。法勝寺
の俊寛僧都が子まるまで。いまで賓へ待るべき。それかまるまば。

遅ぎるもやうやうひね。又が弟よあ〳〵日より。平相國入道どの
のおん使。丹左衛門尉殿。いそぎ〳〵来り給へ。虎の巻を進ぜよ
と〳〵責られど。又い義〳〵申して。その御使を門より追えし。
この大悲山よ閑居しるよ。平相國。さて丹左衛門尉殿。責さい
なんを。やいひらへく成しつ。再たび脱ぎて道すがら。いふせんと
ひらねるおろう。とても昨夜湛海が。件の徳壽を將く
来りしかば。又ふく飲びて。不便なるかな。この童ぶ首を刎て。入
道相國の使よ遣よ。これりく虎の巻よ代。且くあんもを義
べしと。やがて。笑られる入道。面を和げ申ひるん。こゝられの
を。おく来る。そなる迎しそこへ。ぶく一室よ押籠つ。彼丹左衛門
と結ぶて。物うるを牛若。笑も果ぞうち驚れ。これが今宵

こが来りしも。彼童がその公りく〳〵そこ。その故へ如いくく
徳壽丸へ。小男る縁由。且寺谷よその一五一十を。ちもるく申
ぶ〳〵のよ。舞鶴姫も。又驚れ患ひ。そもちぶ〳〵今更よ申る
こそ。これいこが身よ侍りよ。や君と結髪云りひる。姫君へ母
去りの人とも。その男公を撃しそへ。ちゝねれ妬ぶる。又よ勅
てこの〳〵。情由ぶもちぬ世の人よ。いへきんへ悲しめべし。命
よりけく徳壽丸を。救ひ出〳〵進ぶせるん。ものびゆよ伴ひりへ。
いへをぶめく。こへ声高し。外へや洩ん。今宵こが欲るとこ
豈ぶ徳壽のこるんや。彼を救ひ出さんこく。繰第ぶ。
こるねて虎の巻を切ぶめ〳〵ん。今牆を踰く。ん男と相語。明
陳を預て。人の秘書をえんと謀るへ。後ぶれ亦紛るんど。大功へ

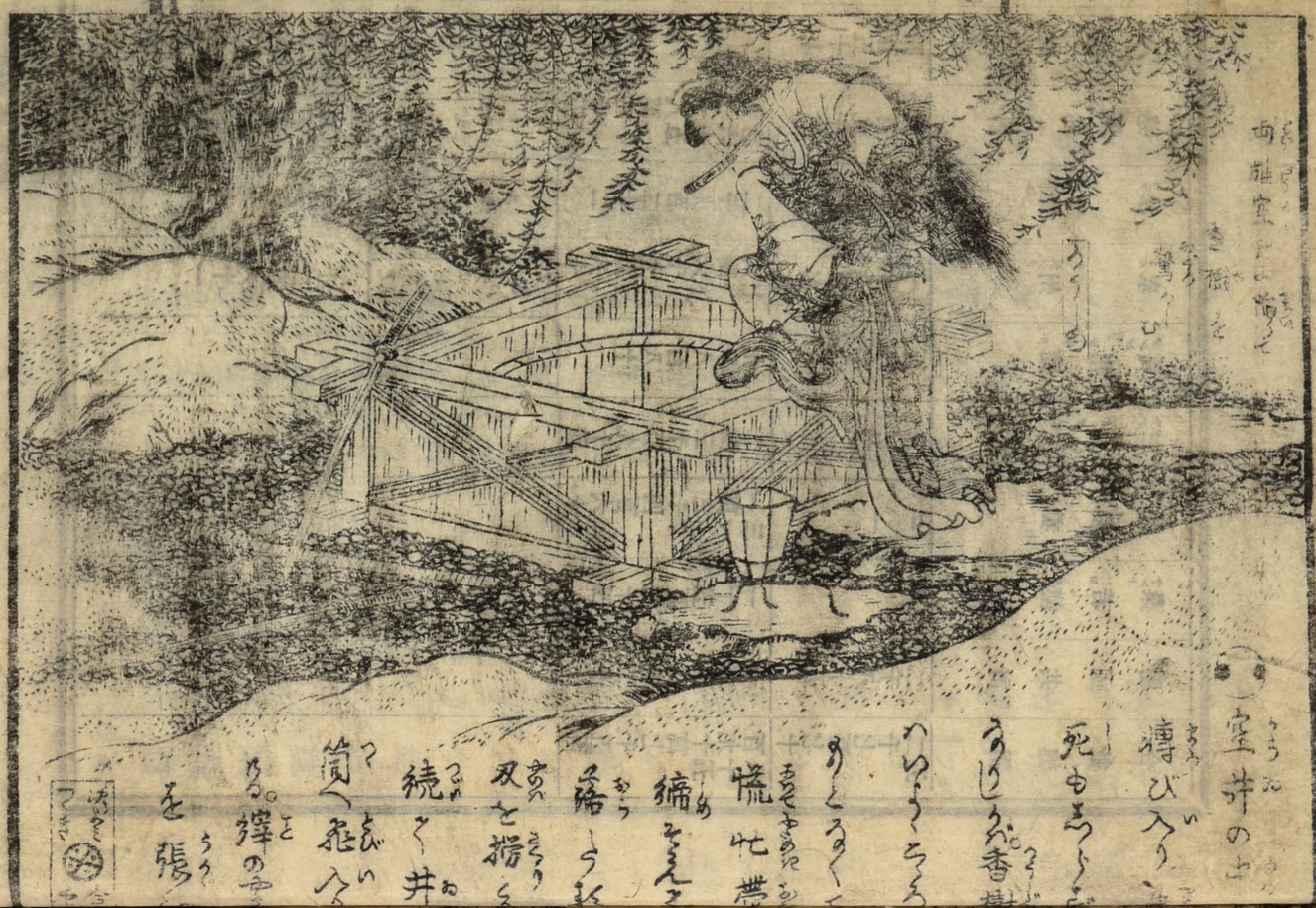
舞鶴
虎を
鳴〻
曹司
誓人

細葉を切り足ど。大礼小礼を辞せど。彼書よ因て。平家の
強敵を対滅し。君の宸襟を安め奉り。父祖の冤を雪ぐ
審夫ともに。賊ともに。雪だるもの厭いねど。いひがひなきものの
女子なり。今宵の儀きあ舟つるす。と陪を引へいうち忘れ。
然と笑ゑ。げに七人の子ハ生とても。婦よ乞る教しとと。賢き
人の賊なるよ。況くあハ夜ものめるかぬ。ちとけのハぬ契まんべ。
倘つぶ父よ戯しやなると。疑ひもハ理なり。こは腐せと。問答も
あくど。つと身を起しく。柱よ掛しる。二面の鏡をとりあろ。
あハせんとふりあぐる。曹司ハ慌しく。舞鶴姫の右の拳ど
汲ろとも。陰ひとめ。鏡へ女の魂と世俗よいハも日の神。
恵を新をぞめもひて。恵をとよ松浦ま。宮居ものあ。二社の

ぬけてぞ憑む。因成き日本ひよ。ぶくまるれ拾の金打。
ぶれや烈女の天下一。疑ひとけしろ。放ちなく。いる教さど。と引あハ
程よ。二面の鏡よ二人の新。ろとハ変る舞鶴姫のいとも異る
面新よ。ぶれかとだろ陰引ぶれ。互よ磯と。ろ落も鏡も裏と
表のく。潜ぶ晴号ハ南天の花よ袖攝る竹縁よ。足音さ
と裳を裾。招げど見えぬ野干玉の。烏夜の中庭彼知ぞ。
密殿の搗や廊を。外面獲りく伴ひぬ。浩如よ蛾王ハ牛若
丸の情ふく。前夜の猥褻を脱ぎて。徳壽丸のろ
ろく。彼悪僧ハ湛海ろんと。突しぬ七光く力草。肌
雪の乙地しく。大悲山の山荘へ。やくよ潜び来く。庭の松が
枝よ攀登り。内のやうを張へよ。夏の夜ぶれば短くく。変峰

寺の境。幽よりうえて。子の刻よりよりて。
と揺ゆり。閉じと叫んで庭よりちち。善悪もそしらぬ時
夜よ。不知案内の事東西。探りつゝ行く。井筒より礙と
躓めり。ちと立戻るおしもあれ。白河の湛海が。腰衣より袴して。既
中目ぶるよりち被り。長ちうる朱鞘の太刀より。刻鞘の解刀を
さ副しく。松明をも持ぢ切つ。一際黑き烏夜の樹立の。
動くをちぢし透し視て。癖者ありと見てれば。袖より後方
より立繞り。刀の鞘を握りぎめく。二三歩引へせば。蛾王い驚と
しく。引く隨よふりり。腰刀を抜んとするよ。羊も抜せず湛海
へ。墻を友く突うせど。けしとびるぐ弟を反り。閉りと抜て切
ぢる。双を刀の弭りく受ち。又ふりあぐる紙ん驚りて。ちもよ

双を抜ぬり。一ト太刀打ちハ後へ引。晃く氷を磨ぬ。
下ちと打ぬ程よ。太刀音中り是笑えん。香樹が指燭
を袖りく掩ひ。麦り生つ二人が間へ。ち出を火光より
走ど。蛾王ハ刀の脊ふく。忽地丁と打落ち。透を引ちり
と湛海へつとりく。隙引組ぐり。香樹ハ吐嗟。驚ち慌く。こ
方彼方と立繞是ど。燈燭ちち滅是つ。孰を湛海。いづれと
癖者。とえもうるぞ。隙引故さんみもうひるれハ。女のちりり
ちぐ。人を呼ぶんも母屋ち遠し。牛若丸と主人
ちり。外より男もうち宿の神をちうよ禱るのかり行よ
二人の力士ち。胸ちを含。沈中。既髪をん髷を上よりう
下よりう。互より負ど挑めひ。組ぶる倒是ぶりて。



空井の上
辱び入り
死もまつ
ありとも香樹
いひ
ろく
慌忙帯
痛
落
双を揺
続く井
貫く飛入
る。弾の
を張

◎ そうこや。鄉よ牛若のあとめよ跟て来りて。捕兵の大れハ
叢藪の中うち立出て。暗号の笛を吹うまゝ。四人の駄兵
垣を押繋て。探りよりつ。そうの勢ひ集合りけ
彼武士声を低して。鬼一法眼が山荘あハ。拔完ありと人の
いひつるを。うの目不審ひらるゝ。今這奴ホが墮るうたゝ。水
音はざるうそ。此井筒を入口ありて。ちうまゝ。
うれよ続といひうけて。樹間立潜れ奥庭の筧の音よりうゝ
て。おぼつかなくも潜じ入りぬ。

第五章 下

抱琴 述情といふ編の末

さて舞鶴姫ハ。牛若丸ハ案内しつゝ宿ずゝ潜ぶとうれ
ば。彼獲さうよ笑ひ。ものを。中庭なる松蔭

よ石を畳しるみうそ。韓戸へ往来の出口ありて。そうりへまゝ。底
よ到るもいとちゝ。この石室ハ韓戸あり。口さゝ狭ゝ底廣く。
書院めいしる二室あり。おうそ五七十人を容べし。ゆ久ようそ。
彼虎の巻を秘おゝ作るうれ。又徳壽とやうんを閉籠おゝ
ハ子舎ハ作り。其処ハ又も籠りをまい。中ず唐戸へ潜び入りし
作りうん。いぶ〳〵と密殺く。庭ハ周りとをりしうう。底おぼつかうゝ
石室へ。常衣裳くりうとも懸しる雲ハ手繰著。夜いうゝ
馬の番うゝ。索ハ携く蜘蛛の。いと危くも下りて。一丈ばかり
ゝ階子あり。うゝ索の端を放ち。後さまハ階子を傳ハ
ゝ底ハ到まゝ。卒ゝいと廣し。名探つゝ。門扉あり。
頑いろゝ。問べ。鍵ハ又が母うあれ。りて来作ゝ。只直推

よ。おのれ何ぞ此殘せよと回答しけるが。牛若の扇をはらりとして。牙を倚りけるが。舞鶴も力を戮しく推ぐる。門扇左右よ發と開れ。おりかぶも四五歩。跟くと走り入りつ。こうんまが鬼一法眼が香深なる道服よ。葛の長れ袴を穿く。銀巻とする小太刀を佩。臥い士峯の雪を戴き。白くもくく末黄な。銀の針めれる髯。胸を掩ひ。眼ら東海の珠を懸。赤くしく。睫長く。彈丸よ似る瞳人を射る。肉脱。骨高く。楊の瘤。松の皮。皺然悪相げよ一癖あれべ。ものとなげしく。然の皮の裙よ坐し。黒漆の書紫よ辟をり。徳壽丸よ燭乗らしく。兵書を繞く居こうる。舞鶴いの如よ。又が籠居こうんこと。やひもくみもが。胸うち騒ぎ。こうくいるよ。こうこうよ。進退既よ窮りく。これもめもぐ蹠く。當下鬼一法眼が佶とえくりるぐよ。眼鏡を対し。小膝をそうこく推向つ。扇勇よこうて肘を張り。牛若丸をもぐしみよ中くく。呵くと冷笑ひ。ぐ女児よ憑しる物の怪が。狐格るぐよこと思ひるよ。鞍馬の奥。僧正が谷みく。夜又天狗よ。兵法を習ひ弱くうとく。世の人を雑く。毛朝が末の子。牛若みくありるよ。これその人を織らどとしども。その骨相をえく猜しこう。汝こく末こうしこと。虎の巻を竊看んこと。雖ぐ。こうが睡まる所の聲を拔。潛る龍と狗しこ狗んとるこ似う。ぐぐくいい。愚みも瞻の太こうる。さいい。平相國の威勢ぐくこくこ。ぐるるこうこうこうこうこうが秘書を。狡ざしくも竊看んとる志が稱ぐ。ものれが時宜よこうく。本意遂さるこうもあんが器いくく。公りとこう。夫虎の巻が。ぐぐ朝の古書みくく。いまぐ人間こ

牛若張天覺が素書の序を殖せる野史の寓言

彩毫ぞ。且そのうるく来まるを尚し。後これをもちいるやいかく
よ。といへよ。牛若ハ夢むりも。臆しる気さるく。膝のたあるを
学手と坐し。道を志あるものハ。圯橋を沓を取て羞とせぞ。牛
若ハ又ちり。あるごを罵らるハ。身の幸ありされがいまぞその書
をえぞといくども。目今問ふ程のものハ。彼虎の巻ハ大江匡房
これを作るといく。その淵源ハ素書より出ぞり。張天覚が素
書の序を云。元素書六編ハ。按ずるを。前漢書の列伝を云黄石
公が圯橋あるく。子房張良が字を授る下のものあり。世の人多く三略
を以ていとて益これを伝るものハ。惧るるハ。晋の乱るくらん盗あり。
子房が塚を發き。正枕の中を於。この書を獲ぬ。凡一千二百四
十六言。或ハ。儒をもてこれを録せ。亦を素書と号るの説あり。

ありハを。僕の初ち。魏晋を至るく五六百年。黄石公が書。帛
をもりく紀しるとも。数百年土中を埋まれく。朽ぞ壊まぞ。
遂を賊の為を發き出されく。後世を伝ふといふも。その説理を
稱ぞ。かれハ後の人黄石張良が名を嫁しく。その書を作さ
るるんもちるぐるぞ。且黄石公が傳異端を庶幾し。疑ふらく。
張良ものが兵法を。人の信ぜるんを欲と深念しく。黄石公といふの
を。作を殺するを。とおもしし。ちれが黄石公ハ子房が為を。釋氏
の阿弥陀ちるん。かくりくぞ。今をもりく古を証。ちぐえざる下をちるさ
人を疑ハを似ちれが。傷痛くちそあるを。ちハ只ありハまぞを
ハ。と回巻りへば。鬼一法眼ほちぐとうち笑く。ちのぞ案を礙
拍。後生おそるべし。天ちの人を生しく。平家の学道を討するの

欤。今まこと緯の序に向へし。世の画工。動もすれば。張良圯橋て
黄石公が沓を取ところを圖するに。黄石は馬に騎く。橋の上にあ
張良は劍を佩く龍に駕。且水中に蹲る。沓を取く黄石公に
進ずるを知る。夫黄石公は神仙なり。馬に騎べくして。亦張良は
神仙にあらざるに却て龍に駕まとり。その為体。古書舊説に
合はざるのみならず。と問に。牛若答く。画はその形を写して。その
心を画くなり。この故に。理をもつて精べくして。黄石公を神仙なるとも。馬
に乗ずれば沓を落さるるなり。張良は仙を学ぶる人なるゆえに。龍
に駕ちざれば水中に立ざるを。且良と龍と音相近し。ゆえに
龍を添るとなり。その圖をなる婦児子。問ていはく。張良なるべ
をもつんいはく。人の画工。物を圖するの用ゆくのごとし。

を画くに。劍を佩ずして水を渉る圖あり。權と劍とその音相近し。
故に劍を画くなり。殖離權なるに沢たるせんとそなえ。こゑを上
利劍とあげえて。利劍に上る仙人なるとも人の為にハ。綸ぜるに
及ばず。殖離權ハ漢の人多。字ハ叔道。和合子。または王陽子。雲房
先生と号す。吐蕃を征して。その軍利あらざるに。深山に走り入て
異人に遇。仙術を受。青龍劍法を学ぶるに。才子傳。列仙伝
ホに見えたり。その人が亦劍に縁あり。且張良ハ亡韓の臣。漢に仕て
強楚を敗る。実に人中の龍。その龍を添。劍を添る。画者の
工夫故なるべし。又唐の世に。殖離權と人ある欤。人同名異
人にこそと答べし。鬼一法眼まとくに嘆賞し。その君蓋世の英才
あり。鄭に問ていはく。戯なり。かくのごとくの意ある合の人ぞ頃

日清盛入道丹左衛門尉とぞ。その人よめらざるをのく。これを伝授せば。今は曹司を引くべし。只願は満足せり。不孝の任しく。虎の巻を授進ずんが。これも又孝あり。女児舞鶴が君を思ひ入れと。その癡情を憐く。今宵婚姻をとり結びしひるがへれよりて歓びあり。天晴れ為も落ると。りの。平家の威勢あも無非。竹園槐門の招待あも赴くべ。媚を栄花の蔭よ憑ぬ老が身も。子孫の闇へ暗くよりて胸の月をも苦しくれ。りよ義うのんや。と手を膝よちく親ぐろ。いと信ぎよ笑えしく。牛若丸も礼儀正しく。こが師の懇を推辞ぐと。こよ播磨の好を締ば。これもあさび君あり戻よ吹。貴老。この徳壽丸が首を刎く。平家よ贈う。虎の巻よ換て清盛入道が責を塞ぐん。とちとろろこの死をふをひへ君子いかのが欲ぐるところをりく。人よ施ちとる。況ち怨もるる童を殺して。理るる入道が求るところよ代んんとて。虎狼よ等しりるべし。且この童ハ。曩よ牛若が結髪せ。俊寛僧都の女児鶴の前が生れり。彼未通女ハ去年の春。宮津の浦あく。扛一死ーさ。と笑くぐあも。いと悼しくもつるよ。今まこの身を殺さんとする雙言敵の。女児ハ更よ娶ぐ。只速よ徳壽を釋しく。牛若よ。りくーりるべ。死こる妨も草の原みく。さこそ喜しと出るめ。ぐこの回答を吹果く。婚姻のこを残ぐし。りよりと。問めくべ。一ハ頻よ感激し。曹司ハこれ義士なり。既よその人を殺く虎の巻を傳授し。且聟とぼび。翁といるよ至こ。いで平家へこの童

が首を贈るべきなれらのとい公安の是、舞鶴も歎びゆへ日夫の情
願一時の遂とるも虎の巻の媒ようなく。なるとて物の蔭みへそる
耻しなるべきあるべきはとうちく居まるべきいくもの毎耻い
ゑなる。舞鶴姫の身のまる。親の恩恵と伏拝て家るの匿して
ものびくの曹司を招き入れ。家の秘書を私のこんせゆうもん
とて案内せを。憎しともあるべきなる。なん慈愛天ちそろー。舞鶴
の。と賠結のなれが。鬼一いるべ莞ゆの。案ぐるの産がゆくのれも
又りをどるく。初孫の貞ゑんとどくべ。女児あしくく。吟るのようるゆ。ゆの
徳壽とゆうん。曹司の前妻。鶴の前の身るべ。舞鶴が為みち。
世俗こいの鰯烏と隅。殺いるれど。日子もう。今宵婚姻を整へ
べ。なん身の憑む。壷あ似げるくゆ。嫉妬しくのれうし。酒の彼

の壷のあり。小四方の上器も。折碎ぬゆうよ。ぞりちろしとりそ身。
挾くとも。壻君いちの座せよ。女児の彼首と席をのるこの。徳壽の
の酌を執らしう。陰ちるべめく陽の焼る。この盃も花天載三一
献の数ちちく。婿夫を結びあいしう。かくく牛若。徳壽丸とらく
付しをその脊をゑん捺う。四年前の鹿谷ゑいゑ。めて面のう
ゑいかくの八五欲六才ふくあり。ちるうべ。至ーえ
も怨れど。谷みくれうるべ。このりてられば難し。いかが
紫しく立地の主従を。救のこの救しが。なん身と思海上在ひま
らま。ゑ一ちくちるよかく悪すく生るを幸甚と宜べ。徒
あの九一八人しく天田のこいくとさう。源君の世を去り入て。憑む神
の下もゑ与ゑ。ゑ与れば。只いつまでも兄君のなん仁慈を仰ぐの。

昨夜一人。今朝又二人。とび一遍救ひ給ふ。あん情。恭くもかたじけなし。
とぞ。しとぞ。そゞろ涙。舞鶴姫も目を拭ひ。おく方孫一
郎。こゝろ男の為ゆゑ。元もとあらせ。くろふもかくふも。頼母
どんな今ようか。ぞはくく。ぞいひ慰まべ。鬼一ゆゑもな。
いの臨をたゞ。彼も。もの。その名に似くる詳鶴をおん
へ。ん。惜の前。ともに。せ。も。地ゆゑ。夫婦同胞全
の。赤る。角。と。師。弟の契約。虎の巻を傳授せん。ぞんれ
ぞ。く。来れと。浩。ゆゑ。綿の嚢。巻軸を。く
一。牛。石。れ。を。く。三。び。抑。戴き。少。退。く。紙。解
人。と。聞き。く。て。ぞ。ゆ。ぞ。く。返。繞。く。吟。咲。世。
名。る。虎。の。巻。を。る。物。と。い。い。ぞ。と。

かく。浅。る。抑。の。書。四。十。二。箇。條。の。秘。文。咒。法。を。ひ。く。要。
と。ぞ。後。験。者。の。示。ゆ。く。英。雄。の。好。る。所。ゆ。ぞ。おゝ。ぞ。
大。ゆ。る。の。咒。法。秘。文。の。を。頼。く。敵。と。戦。ひ。その。法。ゆ。ぞ。
手。を。束。く。首。を。敵。に。授。戮。の。兵。を。失。ふ。く。可。る。ん。や。ゆ。愚。る
所。為。る。ゆ。且。の。書。傳。来。の。所。以。を。記。く。人。皇。十。五。代。神
功皇后の元年辛巳。履陶と。人。呉。より。傳。来。を。皇。后。の。書
に。因。く。三。韓。を。対。ゆ。ぞ。く。ゆ。く。官。庫。に。蔵。られ。る。ゆ。
神。天皇。御。代。ゆ。く。後。ゆ。新。兵。書。の。世。に。傳。ゆ。ば。野。ゆ。の。人
絶。べ。ゆ。ぞ。く。ぞ。て。その。書。を。呑。ゆ。この。友。に。八。幡。大。井。を。軍
神。と。ぞ。記。く。ぞ。ゆ。ぞ。ゆ。ぞ。記。惣。神。天。皇。の。十。五。年。に。初。て
百。済。國。より。漢。土。の。書。籍。を。進。り。て。王。仁。来。兎。道。の。稚。郎。子。に。

俊寛僧都
黄公石上三芝秀
陶令門前五柳春
司馬法韓非
鬼一法眼

音列を教へ給へりとぞいふなる。いまだ國ふみ漢字をだに熟
ざる。神功皇后振旦のあんとなれば。履陶が兵書をいろはにて
ひらけん。その餘醍醐天皇のあん時。大江維時卿しるす。砂金十
万両を。異國へ賣しつかはして。明州の龍取公より。
兵法を習ひつひつ。維時卿。業平四年の春。帰朝しぬ。龍取公
が兵書を献るとぞ。源義家朝臣。伝ふ。義家。兵法を達して。
卿の時。よりて。奥州後三年の合戦。勝利をえ給ひぬ。紀せしとぞ。
つくるを。現のごとくなる。維時卿勅を奉て。兵法を学んとぞ。
異國へつかはし。國史。見えたり。龍取公といふは。唐書。伝
る。その伝。黄石公より。張良。伝へ。亦漢高祖。練名公より。

陶安履陶ホよ七傳。又須亀公より五伝へて。龍取公に
至るといふなり。悉疑ふべし。これらをもて推しはかるに全く
列園集中の虎の巻。よりもあらじ。かぞうの物語。小児の
ものがたり。莫きざくん。あり。奇怪なりと。いさまれて。巻もつくさで
うつ。鬼一法眼大に怒り。こは。嘆かはし。こは。嗚呼。黄口
堅児。才。跨て。古書を窃り。剥引裂捨ることを安かりね。
かくの物狂。小冠者。うんぬんとぞ。家の重宝を喪れ
て。くくも悔しれ。道の仇。家の仇。逃さじと。罵りつつ。床う
立。長刀の鞘を脱しくかけんとするを。牛若。閃りと。飛離て。
扇をかつく。拄へば。鬼一。いかり。焦燥く。葛の袴の裾踏ぬ
緒。縺。羅んと。突くるも。危く。汗握る。手の舞足の舞鶴

徒ぞ。ゆるすとも携著を。傷られる。揮拂ひ。堰ど留りぞ下もく
水の。蜘手結菓十文字。ゆて立るを受流し。受流しく悩しく
ちく見うを。長刀の月は翳ける扇の日輪。陽は開けば。陰は閉
往一来。一上一下。けんとされど糸抜の。えとて見えて曲司
の早技よろ忙く。鬼一ハさんとなりけり。

中山堂

원씨 족보 [illegible]